

路傍の木乃伊

夢野久作

青空文庫

私は遠からず路傍の木乃伊ミイラになつてしまひそうな気がする。口をポカンと開いた……眼の前の空間を凝視した……。

私は中学を卒業した切り上の学校に行かないが、その中学時代が小説の耽読時代であつた。漱石、蘆花、紅葉、馬琴、為永、大近松、世阿弥、デユマ、ポー、ホルムズ、一千一夜物語、イソツプなぞ片端かたはしから読んだ。二葉亭、涙香るいこう、思案外史、鷗外なぞも漁つた。

それから自然主義の勃興にぶつかった。

自然主義一流のコクメイな写実式の描写を、気の永い努力で無理に読み味わつては感心した。これが文学だな……と思つて熱心

に模倣し愛誦していた。絵でも音楽でも西洋風の写実主義のものを尊重した。とにかく西洋人の仕事を矢鱈に崇拜して、唯物個人主義的な觀念に深入りして行つた。

私ばかりでない。その頃の日本人は皆謙遜であつた。西洋文化を見境いもなく吸収するのに忙がしかつた。同じ日本の風景でも日本人の手に成つたものは頭から輕蔑して、毛唐のタッチばかりを随喜した。毛唐のヨサがわからなければ芸術はわからないとまで云い合つていた。

そのうちに西洋流の唯物資本主義が日本で飽滿して、腐敗して、自己分解を初めた。

唯物資本主義者の根本思想が、表面忠君愛国の美名に仮装されていながら内実は、社会主義者と同様の虚無思想であり、その生活の目標が弱肉強食と黄金万能の動物的享樂以外の何物でもない事がわかった……無良心、無節操、無意気、無感激な、ただその時その時の風まかせで生きて行く人間でなければ、大衆生活の間入りが出来ないように訓練された資本主義、唯物主義、個人主義者の子孫たち……そのような投遣りなげやな傾向の日本の大衆が滔々とうととしてエロ、グロ、ナンセンスの芸術に走り、犯罪小説、もしくは探偵小説のスリルに没入して行つた。それはさながらにアール中、モヒ中の患者たちのように、そうした極端な刺戟をアトからアトから渴望し初めた。唯物個人主義の支配階級の連中が、そ

の黄金の力で常に飽満しているエロ、グロ、ナンセンスの残忍、深刻なものを、彼等の夢の中に求めて止ま^やなくなつた。

非常な勢いで発達して来た日本国内の印刷能力が、これに呼応し、活躍して、忽ち^{たちま}のうち^{うち}の中に大衆を飽満させて行つた。見る間に純文学の滅亡を叫ばしむるに到つた。

一種の国産品の大量生産……それが現在の^の大衆読物の氾濫ではあるまいか。

しかもその国産品の氾濫も最早^{もはや}、行き詰まりかけているのではあるまいか。

多量の雑誌が出て来て、それがドシドシ売れて行く。読者は皆、

芸術鑑賞の紋もんつき付袴はかまで読む事を好まない。仰向けに引っくり返つて、安易な夢を逐おおうとしてしている事がわかればあとは、材料の安価と、商品化の手軽さが問題になつて来るばかりである。

真剣な作家の真剣な作品を、骨を折つて集めるのは馬鹿馬鹿しい事になつて来る。ヨタでも焼直しでも何でもいい、読者がちよつと面白がりさえすればいいという事になつて来る。そこいらのゴミ溜ためや、よその畠から失敬して来た材料にアニン塗料とサツカリンで色と味を附けた、ちよつと口あたりのいい料理を作るのが芸術界の大勢になつて来る。あとで庖丁を入れられたり、味加減をされたりしても決して文句を云わない。云わば扱い易い料理人が到る処にウヨウヨ出て来る。

高価^{たか}い金を払って、三拝九拝しても芸術的な作品しか作り得ない、ちよつと給仕人が手加減を加えても、直ぐに尻を捲くつてムクレ返るような旧式の板前は、見る見る路頭に迷い初めた。

しかし読者の味覚は案外に敏感なものである。日増しの材料とアニリン塗料と、サツカリンの味とにいつとなく飽きて来る。もつと生きのいいビタミンに満ち満ちたものが、云わず語らず^{うち}の中に慾求されて来る。

実話の流行、新進作家の濫造、座談会の隆盛が、この慾求を満たすべく現われ初めたが、これとてもアニリン、サツカリンで味を占めた店は、真剣なものを作ろうとしない。彼等はお客を馬鹿

にして金を儲ける道を知り過ぎてゐる。それがホントの金儲けとさえ信じてゐる向きもある位、資本主義社会の悪習に慣れてゐる。やはりアニリン、サツカリン趣味の名だけの新進創作、実話、座談会を濫造する。

固い、消化の悪い出版が流行り初めた。^{はや}もう大抵の読者は胃酸過多になつてゐるらしい。古い古い缶詰めやタクアンが美味く感^{うま}ぜられるくらい大衆は胃下垂状態に陥つてゐるらしい。

大衆の読書趣味が行き詰まり初めたようである。何を読んでも面白くななくなつて来たようである。

日本が敗けるか勝つか……といったようなものが売れ出したら

文学とか芸術とかいうものは、黙って引込むべきではなからうか。

暫く芸術をやめて戦争する方がよくはあるまいか。今の読者の消化不良は、たしかに運動不足のせいもあると思う。

一^ひと運動して元気を回復した後にドンナものが読みたくなるかだ。

今一度エロ、グロ、ナンセンスでもあるまい。昔ながらの缶詰文学でもあるまい。

三越、白木屋のスシと河^{かし}岸のスシの味を味わい分け得るのは一種特別の最高級のブルジョア根性の舌でなければならぬ。同様に、吾等の見ていた、純文学の価値は、資本主義社会特製のブルジョア頭でなければ、批判出来ないものであつたかも知れない。

そうして永久に亡び去るべき運命を持った芸術であつたかも知れない。

芸術が亡びない限り純文学が亡びないと信じたのは、吾等の錯覚であつたかも知れない。

とにかく、何もかもが八百八街の幌自動車の数と一いっしょ所に過ぎ去り、且つ、消え失せて行きつつ在る。その過ぎ去り消え失せるスピードが、時々刻々に加速度化しつつ在る。私はただ茫然と、それを見み慌とれているきりである。

遠からず路傍の木乃伊になつてしまひそうである。口をポカンと開いた……眼の前の空間を凝視した……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：しず

2001年7月23日公開

2006年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

路傍の木乃伊

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>